

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 15 日現在

機関番号：32690

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520633

 研究課題名（和文） 短期語学研修を含む通年型英語学習プログラムにおける
学習ストラテジー指導の効果

 研究課題名（英文） The effects of the strategy training in a full-year English language
instruction including a short study-abroad program

研究代表者

尾崎 秀夫（OZAKI HIDEO）

創価大学・文学部人間学科・准教授

研究者番号：80339762

研究成果の概要（和文）：学習ストラテジー指導のうち、扱われることの少なかったスピーキングストラテジー指導の効果を検証した。検証にはアンケートを用いる必要があったが、国内で広く用いられてきた the Strategy Inventory of Language Learning (SILL) 7.0 (ESL/EFL)（日本語版）はその不備が度々指摘されてきた。本研究ではその問題を可能な限り解決し、修正版 SILL を作成することができた。その上で、作成した修正版 SILL を用い大学英語授業におけるスピーキングストラテジー指導につき調査したが、指導の効果は認められなかった。修正版 SILL と習熟度の増減の間にも相関は認められなかった。これらは予測に反する結果であったが、データを仔細に分析してみると、ストラテジーの習得には著しい個人差が見受けられること、習得し易いストラテジーと難しいストラテジーが存在すること、比較的習熟度の高い学習者の方がストラテジーを習得し易いこと、教室で学んだストラテジーを教室外で練習する機会を持つ学習者がストラテジーを習得していることなどが判明し、今後の学習ストラテジー指導の実践や研究に有益な示唆を与える結果を残すことができた。

研究成果の概要（英文）：This study examined the effects of the training of speaking strategies, which has not been focused on in the learning strategy training research. In the study, it was necessary to use a questionnaire. The questionnaire used most often in Japan was the Japanese version of the Strategy Inventory of Language Learning (SILL) 7.0 (ESL/EFL), but this inventory has been criticized for its inherent problems. In this study, the researcher tried to resolve the problems and succeeded in revising the SILL Japanese version. The study explored the effects of the speaking strategy training in EFL classes of a university, but it failed to detect the significant effects. It did not find strong correlations between the results of the revised SILL and the increases and decreases in proficiency of the subjects, either. All these were against the expectation; however, when the data was analyzed in detail, it was revealed that there were great individual differences when learners tried to learn strategies; there were strategies which were easier and more difficult for learners to learn; learners at the relatively higher proficiency level learned strategies better; learners who practiced strategies outside the classroom learned them better. Implications from all these results will surely be useful for the practice of strategy training and future research of the same topic.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
総計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：英語教育一般・学習ストラテジー

1. 研究開始当初の背景

学習ストラテジー指導に関する研究は、語彙、リスニング、リーディングについて行われることが多く、スピーキングやライティングについてはあまり進められてこなかった。しかし、昨今のコミュニケーション中心の指導では、学習者がスピーキングやライティングといった産出スキルを積極的に発揮することが望まれている。さらに、高等教育では内容中心指導も盛んになりつつあり、そこで学習者は英語を用いて専門知識を習得するという課題に取り組まなければならない。その過程では、正確に話せたり書けたりする能力が一段と要求されている。こうした状況下において学習者は、教室内外において、自らの学習を効率的に進め、効果を増大させることが望まれている。その一助として学習ストラテジーを利用する価値は大きい。しかし、学習者自身による努力は散発的な試みに終わってしまいかねないため、確実に成果が上がるようストラテジー指導として体系化し提供する方がよい。そのためにはまずストラテジー指導の効果を確認する必要がある。本研究はこのような問題意識のもと、特にスピーキングストラテジー指導の効果に焦点をあて、その効果について考察した。

2. 研究の目的

本研究は、夏季海外短期語学研修（以下、単に語学研修と記す）を挟んだ通年型英語学習プログラムにおける、学習ストラテジー指導の効果の検証を目的としている。習得した学習ストラテジーを実際に応用する場として語学研修を位置づけ、研修が果たす役割に注目しつつ、学習ストラテジー利用の変化や、習熟度の増減に与える影響を考察する。

本研究は総研究課題として「短期語学研修を含む通年型英語学習プログラムにおける学習ストラテジー指導は学習者の学習ストラテジー利用にどのような影響を与えるか」を設定した。このもとに以下の研究課題細目を置いた（これ以降、研究課題細目は単に研究課題と表記する。研究課題はすべて語学研修を含む通年型英語学習プログラムにおいて学習ストラテジー指導を受けた大学生英語学習者を対象として作られた。ここで「通年型英語学習プログラム」と言う場合、語学研修と、前期・後期の学習ストラテジー指導を含めた英語授業の全体を指す。学習者には語学研修参加者と不参加者がいたが、単に「学習者」と言う場合は、語学研修参加者と不参加者の両方を含めている。）

1-1. 通年型英語学習プログラムにおいて修正版 Strategy Inventory for Language Learning (SILL) により測定される学習者の学習ストラテジー利用頻度に変化はあるか。

1-2. 通年型英語学習プログラムにおいて修正版 SILL により測定される研修参加者の学習ストラテジー利用頻度に変化はあるか。

1-3. 通年型英語学習プログラムにおいて修正版 SILL により測定される研修不参加者の学習ストラテジー利用頻度に変化はあるか。

1-4. 通年型英語学習プログラムの前半において修正版 SILL により測定される研修参加者と不参加者の学習ストラテジー利用頻度に違いはあるか。

1-5. 通年型英語学習プログラムの後半において修正版 SILL により測定される研修参加者と不参加者の学習ストラテジー利用頻度に違いはあるか。

2. 通年型英語学習プログラムにおいて学習者の学習ストラテジーの利用、学習ストラテジーに対する信条や態度はどのように変化するか。

3. 通年型英語学習プログラムにおいて修正版 SILL により測定される学習ストラテジー利用頻度と TOEIC-IP により測定される研修参加者の習熟度との間には関連があるか。

3. 研究の方法

(1) データ収集

研究課題 1-1~1-5 に答えるために、アンケート調査を実施する必要があった。国内の学習ストラテジー研究においては SILL 7.0 版 [ESL/EFL] の日本語版（オックスフォード、1994）が広く使用されてきたが、同時にその不備も度々指摘されてきた。本研究では、その欠点を補いより精度を高めた修正版 SILL を作成し使用した。

修正版 SILL の作成は、まず SILL の各項目の精査を基に加筆、言い換え、削除を行い、全体を 25 項目とした。それを用い 268 人の大学生英語学習者に回答してもらった。その回答結果につき因子分析を実行した。因子の抽出にはイメージ因子法を用い、固有値 1 以上の基準を設け、プロマックス回転を行った結果、最終的に 19 項目、5 因子（①記憶・認知 ②補償 ③メタ認知 ④情意 ⑤社会）を抽出し、修正版 SILL 作成を完了した（Cronbach $\alpha = .817$ ）。

修正版 SILL は学習者に 2 回（平成 24 [2012]年 6 月と同年 12 月）答えてもらった。語学研修参加者にはそれに加え、研修中に 1

回（同年8月）答えてもらった。いずれも研究代表者が配布し、約10分程度で回答してもらい、その場で回収した。

研究課題2において、アンケート調査では捉えきれない学習者の学習ストラテジー使用の特徴を探るためジャーナル分析を行った。参加者は平成24年度（2012）前期・後期週に一度（前期は第6週から第15週まで、後期は第2週から第14週まで）ジャーナルに教室内外でのストラテジー使用につき記入した。参加者は『この1週間英語で話す時、うまく話せるようにどんな工夫をしましたか』という問いにつき、定められた提出用紙に記入した上で、学内オンラインサイトのレポートボックスに提出した。

研究課題3については、研修参加者が6、8、12月に回答した修正版SILLのスコアと7、9、12月のTOEIC-IPのスコアを用い、ピアソン相関係数を求めた。

(2) 参加者

本研究に参加したのは東京都内私立大学文学部2年生で平成24年度前期・後期学習ストラテジー指導が行われた『現代英語演習I』（前期）・『現代英語演習II』（後期）の両方を履修した26人の学生である（男子2人、女子22人）。このうち8人が語学研修に参加した。学部は専修に分かれており、英語・英米文学専修に23人、社会学専修に2人、総合人間学専修に1人が所属していた。

(3) 学習ストラテジー指導

本研究の主な目的は、学習ストラテジー指導の効果の検証にあった。その意味で、学習ストラテジー指導の要素を取り入れた授業の内容は本研究の骨格の一つを成していた。以下、学習ストラテジー指導の要素を取り入れた授業の内容を記す。

前期の最終的な目標は文学作品の内容について議論できる能力を養うことであった（前期終了後の語学研修においても文学作品について議論を行う授業があり、その準備の意味もあった）。議論に必要な、言わば「スピーキングストラテジー」を授業の中で紹介し、練習してもらえよう各活動を考案した。前期指導したスピーキングストラテジーは以下のとおりである。

- ① 複文を作って話す。
- ② テキストにある表現を使いながら話す。そっくりそのまま使うのではなく、単語や句、文の一部を利用して自分の文を作る。
- ③ 証拠を示しながら、理由を言う。証拠は物語の中にあるものを使う。
- ④ 決まり文句や使い慣れた表現を使う時、それに少し付け加えたり、違う語を使ってみたりして、より長く、複雑な表現にする。
- ⑤ 意味交渉する（理解確認・明確化要求・内

容確認）

- ⑥ 質問する（できるだけ多く相手が話せるような質問をする）。
- ⑦ 日本語を使いたくなったら、できるだけ他の英語に言い換える。簡単な表現を使う、言えなかった英語の表現をメモしてあとで確認する。
- ⑧ 経験を話す。
- ⑨ 一度頭の中で文を作ってから話す。

後期のスピーキングストラテジー指導においては、前期の内容を踏まえ、よりアカデミックなスピーキングストラテジーの紹介と練習に主眼を置き、文学作品をめぐる高度な議論ができる能力の開発・育成に努めた。後期扱ったスピーキングストラテジーは以下のとおりである。

- ① ブレインストーミング
- ② 順序立てて話す。
- ③ 賛成する。
- ④ 反対する。
- ⑤ 判断の根拠や材料を示す。
- ⑥ 比較する。
- ⑦ 異なる観点を示す。
- ⑧ 要約する。
- ⑨ 視点を変えて話す（その上で）自分の見方を示す。
- ⑩ 解釈を言う。
- ⑪ 表現を言い換える。

(4) 語学研修

前期『現代英語演習I』の履修者のうち、13人が語学研修に参加した（13人中5人は後期『現代英語演習II』を履修しなかったため、『現代英語演習I』と『現代英語演習II』の両方を履修した者のうち、語学研修に参加したのは8人である）。研修は平成24年8月5日～8月25日（3週間）英国バッキンガム大学で実施された。研修は、English through Literature（Animal Farmについて英語で議論する）とEnglish through Cultural Studies（日英文化比較）の2種類の授業（両方とも一回1.5時間）から成り立っていた。これらの授業が土日や見学旅行以外の日に合計11回行われた。文学作品を英語で討論し、日英の文化を英語で学ぶという参加者の専門を意識した内容となっていた。それだけに、英語で専門知識を習得したり、議論したりするスキルが必要とされた。English through Literatureで用いられたテキストは、Hodder Education出版のAnimal Farmで、これは原書ではなく挿絵の多く入った簡易版であった。

(5) 分析

研究課題1-1、1-3、1-4、1-5については、t検定、研究課題1-2については一元配置分

散分析を実行し、修正版 SILL に対する回答の平均点に学習者間において有意な差が認められるか検定した。

研究課題 2 については、ジャーナル分析を行った。ジャーナルの分析は、キーフレーズの抽出からカテゴリーを作ることで行った。キーフレーズは各週の全記述の中でスピーキングをより流暢に活発に行うため参加者が実際に行った行為、または文脈から行ったことが明確である行為から選び出した。故に「～するとういと思った」「～できればよかった」等の記述は含めなかった。さらに、類似した複数のキーフレーズを一つにまとめることでカテゴリーを作成した。この時、キーフレーズが単独でそのままカテゴリーとなることもあった。

研究課題 3 については、研修参加者が 6 月に回答した修正版 SILL のスコアと 7 月の TOEIC-IP のスコアについて、8 月に回答した修正版 SILL のスコアと 9 月の TOEIC-IP のスコアについて、12 月に回答した修正版 SILL のスコアと 12 月の TOEIC-IP のスコアについて、ピアソン相関係数を求めた。

4. 研究成果

(1) 研究課題 1-1 の分析結果と考察

研究課題 1-1 に答えるため、修正版 SILL の 6 月 ($M = 3.57, SD = 0.41$) と 12 月 ($M = 3.57, SD = 0.42$) の学習者の回答につき t 検定を実行した結果有意な変化は認められなかった ($t [23] = -0.96, p = .93$)。分析結果から、学習者の学習ストラテジー利用頻度に変化はないと言える。

研究課題 1-2 に答えるため、研修参加者が回答した 3 回の修正版 SILL につき一元配置分散分析を実行した結果有意な変化は認められなかった ($F [2, 31] = .773, p = .470$)。分析結果から、研修参加者の学習ストラテジー利用に変化はないと言える。

研究課題 1-3 に答えるため、修正版 SILL の 6 月 ($M = 3.56, SD = 0.45$) と 12 月 ($M = 3.61, SD = 0.43$) の研修不参加者の回答につき t 検定を実行した結果有意な変化は認められなかった ($t [15] = -0.89, p = .39$)。分析結果から、研修不参加者の学習ストラテジー利用に変化はないと言える。

研究課題 1-4 に答えるため、6 月の修正版 SILL の研修参加者 ($M = 3.69, SD = 0.30$) と研修不参加者 ($M = 3.56, SD = 0.45$) の回答につき t 検定を実行した結果有意な変化は認められなかった ($t [27] = -0.93, p = .36$)。分析結果から、通年型英語学習プログラムの前半において、研修参加者と不参加者の学習ストラテジー利用頻度に違いはないと言える。

研究課題 1-5 に答えるため、12 月の修正版 SILL の研修参加者 ($M = 3.50, SD = 0.41$) と

研修不参加者 ($M = 3.61, SD = 0.43$) の回答につき t 検定を実行した結果有意な変化は認められなかった ($t [22] = 0.56, p = .58$)。分析結果から、通年型英語学習プログラムの後半において、研修参加者と不参加者の学習ストラテジー利用に違いはないと言える。

分析結果からは、通年型英語学習プログラムにおける学習ストラテジー利用頻度の変化は、研修参加者、研修不参加者双方において見受けられなかった。このような結果になった原因として以下が考えられる。

①指導において強調したスピーキングストラテジーの利用状況は修正版 SILL という学習ストラテジー総体の利用状況を調べるアンケートを用いて測定することはできなかった。

②スピーキングストラテジー指導自体に学習ストラテジー利用が総体的に変化するほどの影響がなかった。

③学習ストラテジー利用に関する明示的指導が足りなかった。

④学習者が学習ストラテジーの意義や価値について深く理解するところまで至らなかった。

⑤まして、実践・応用するまでには及ばなかった。

研修参加者に限っては、途中、普段とは学習及び生活環境の大きく違う語学研修において、大きなインパクトを受けたと思われるが、それが学習ストラテジー利用の変化という結果となって現れるまでには至らなかった。後期の指導後も変化は起こらなかった。これは、上記のように、研修で経験した以上に挑戦的な課題がなかったためかもしれないし、学習ストラテジー利用の変化となって現れるにはさらなる支援が必要だったのかもしれない。これらに対する一層の考察は今後の研究に委ねたい。

(2) 研究課題 2 の分析結果と考察

前期はスピーキングストラテジー指導に直接関連する記述は少なく、学習者の個人的な試み・工夫を表す記述が多かった（「できるだけ話した」「とぎれないように言った」など）。反対に、後期はスピーキングストラテジー指導に直結するカテゴリーが見られるようになり（「要約した」「比較した」「判断の根拠や材料を示した」など）、指導の影響が生じていることがうかがえた。

前期は「できるだけ話した」や「とぎれないように言った」など、焦点の定まらない記述が多かった。それでも「言い換え」や「意味交渉」など指導したスピーキングストラテジーの使用を反映した記述も含まれていた。しかし、全体としては指導されたスピーキングストラテジーに対するよりも、個人の経験や着想に基づく工夫についての記述が

多かった。

これに対し、後期に入ると大きな変化が認められた。スピーキングストラテジーについて焦点を絞った記述が増え、既習スピーキングストラテジーの実践・応用や、効果の分析・認識等が見受けられるようになった。そこには、既習スピーキングストラテジーを組み合わせて使うなどの高度な試みや、場面に応じたスピーキングストラテジーの使い分けを調整するメタ認知能力の発達をうかがわせる記述も含まれていた。

上記の変化は、前期ではスピーキングストラテジーについて明示的な指導が欠けており、その反省を踏まえ後期には、スピーキングストラテジーの指導をより明確に指導したことから生じた可能性がある。前期から明示的指導を行っていたら、早い段階からスピーキングストラテジーについての考察や実践、また内面化などに関する記述があったかもしれない。

それでも、後期のジャーナルにはスピーキングストラテジーの習得に関し、多大な示唆を含む記述があった。まず、指導されたスピーキングストラテジーがすぐに内面化されるわけではなく、一定期間の後、学習者に取り込まれるようである。これは第 10 週くらいからようやくスピーキングストラテジーについての具体的な記述が現れることから分かる。

その際、学習者全員が等しくスピーキングストラテジーを習得していくのではなく、そこに著しい個人差が生じていた。スピーキングストラテジーの価値や意義を深く認識してそれを実践のレベルまで高められる者もいれば、どうしても使うことができないと吐露するものもいた。

スピーキングストラテジーについてよく理解し実践できる者の特徴は、概して習熟度の高い学習者のようである。さらに、上級の学内英会話練習施設に通うこともこれら学習者の多くに共通している（学内英会話練習施設は上級者用と初級者用の 2 種類があり、どちらも無料で利用できる）。彼らは、実際のスピーキングに際し語彙や文構造の選択等に認知的エネルギーを振り向ける必要がない分、スピーキングストラテジーを利用する認知的エネルギーの余剰がある。そのためスピーキングストラテジーを使うことができるのであろう。さらに、このタイプの学習者は、上級の英会話練習施設に通うという、スピーキングストラテジーの応用の場を持っていた。彼らはそこでスピーキングストラテジーを使い、効果を確認していたのであろう。その意味で、授業における指導と、学んだスピーキングストラテジーを練習する場があった時に習得が進む可能性がある。

スピーキングストラテジーの価値や意義

について深く認識するのもこのタイプの学習者である。彼らの中には、場面に応じてスピーキングストラテジーを使い分けることや、複数のスピーキングストラテジーを組み合わせることの効果、ライティングに応用できるものを意識するなど、高度な分析や実践を試みるものまでいた。

ただし、仔細に見た場合、スピーキングストラテジーを利用できる学習者においても、使うことのできるスピーキングストラテジーと使うことのできないスピーキングストラテジーがある。「比較する」「言い換える」「同意する」などは使いやすく、「視点を変えて話す」などは使いにくいようである。これは、すでに身につけているスキルを発展させるもの、活性化すればよいもの、または使う状況が比較的多くあるものは使えるが、それとは逆に初めて経験するもの、日常あまり使う機会がないものは使えないと言えるかもしれない。

スピーキングストラテジーを使うことができない学習者は、英語を話すだけで精一杯で、会話の最中にスピーキングストラテジーについて考えたり、まして使ったりする余裕などない、とほぼ共通して述べている。こうした学習者は習熟度が低いとは一概に言えないが、会話の最中に語彙や構造の選択・構築に認知的エネルギーを取られるあまり、その他の認知的活動に回す余剰エネルギーがないのは事実と言ってよいであろう。これは、習熟度の高い学習者が、語彙や文構造の選択・構築にはさほどエネルギーを必要とせず、その他の認知的活動にエネルギーを振り向けられるのと正反対の現象である。

しかし、スピーキングストラテジーをうまく使えない学習者の中には、使えるようになりたい、使えたらよいと思うなど、その価値や意義を理解している者もいる。こうした学習者は、将来習熟度が高まり、認知的エネルギーの余剰分をスピーキングストラテジーの選択や利用に振り向けられるようになった時、実践できる可能性がある。問題はその時、スピーキングストラテジーの存在を思い起こし、応用できるかどうかである。このためには、ある一つの授業における指導に終わらず、プログラム全体で継続的にストラテジー指導を施すことが大切となる。

(3) 研究課題 3 の分析結果と考察

研究課題 3 に答えるため、研修参加者による 6 月の修正版 SILL への回答と 7 月の TOEIC-IP の結果の関係を探るため、相関分析を行った。その結果、両者の間に強い相関は見受けられなかった ($r = -.367, p = .217$)。

同様に、研修参加者による 8 月の修正版 SILL への回答と 9 月の TOEIC-IP の結果の関係を探るため、相関分析を行った。その結果、

両者の間に強い相関は見受けられなかった ($r = -.393, p = .184$)。

さらに、研修参加者による 12 月の修正版 SILL への回答と 12 月の TOEIC-IP の結果の関係を探るため、相関分析を行った。その結果、両者の間に強い相関は見受けられなかった ($r = .264, p = .668$)。

TOEIC-IP と修正版 SILL のスコアの間に強い相関は認められなかった。これは、TOEIC-IP によって測定される習熟度と修正版 SILL によって測定される学習ストラテジー利用の度合いは直接関係ないことを示唆している。分析の対象となった研修参加者の TOEIC-IP スコアは、学習ストラテジーの習得とはほぼ関係のない領域で能力が発揮されたものと考えられる。TOEIC-IP で高いスコアを得るのに必要な学習ストラテジーは、修正版 SILL で測定される学習ストラテジーとは別のものかもしれない。或いは、修正版 SILL が測定の対象とする学習ストラテジーを、TOEIC-IP のようなテストに生かすスキルに研修参加者が昇華していないのかもしれない。いずれにしても相関係数のような客観的な指標を用いて習熟度と学習ストラテジー利用の関係を捉えることはできず、この観点から学習ストラテジー指導の効果を示すことはできなかった。

(4) 結論

本研究では、1 年間にわたる学習ストラテジー指導の効果を量的・質的アプローチから分析した。研究の基本的な枠組みとなる学習ストラテジー指導を含む大学前期・後期の英語授業の教案を作成、実施した。量的分析において用いたアンケートについては、長くその不備が指摘されてきた日本語版 SILL の修正版を作成した。学習ストラテジー指導を含む英語授業履修者に、修正版 SILL に 2 回 (研修参加者は 3 回) 回答してもらった。分析の結果、参加者の学習ストラテジー利用に変化は認められなかった。学習ストラテジーの利用頻度と習熟度の間に強い関連性も見受けられなかった。質的分析においては、学習ストラテジー習得における個人差、習得が比較的易しいストラテジーと難しいストラテジーの存在、ストラテジーの習得を促進する要因等が明らかになった。データ収集、分析、考察などの段階においても緻密さに欠けた部分はあったが、課題が多く残る学習ストラテジー習得研究につき、わずかながら貢献できたものと確信している。

5. 主な発表論文等

[その他]

研究成果報告書

尾崎 秀夫「短期語学研修を含む通年型英語

学習プログラムにおける学習ストラテジー指導の効果」2013

6. 研究組織

(1) 研究代表者

尾崎 秀夫 (OZAKI HIDEO)

創価大学・文学部人間学科・准教授

研究者番号：80339762